

横浜プロテスタント史研究会報 2017.4.15 No. 60

横浜プロテスタント史研究会 〒247-0004 横浜市栄区柏陽27-9 岡部一興方
TEL・FAX 045-894-7010 Eメール okabek@jcom.zaq.ne.jp ホームページ <http://yokoproken.com>

「太平洋戦争中におけるFMCNA (北米外国伝道協議会)の日本研究」

原 真由美

I はじめに

アメリカン・バプテスト・チャーチズの宣教師ロバート・ステイブンス著『根づいた花』の中に、すでにアメリカが太平洋戦争中に敗戦後の日本への再宣教について検討しているという記述を発見し、戦後の日本宣教に関するアメリカ側の大きな視点に驚きを感じた。また、捜真学院元院長 日野綾子著『豊かなる流れ』の中で、一時は家庭婦人であった日野自身が若い頃にはかなわなかったアメリカ留学を、教会、学校、婦人会の活動をアメリカ・バプテスト派からの支援で戦後果たすことが出来たのだが、このようなアメリカン・バプテストの支援がどのように行われていったのかという素朴な疑問と共に、アメリカの政治、経済の面からの日本の先行研究が多くあるなかで、本研究はあまり行われていないキリスト教という側面からの研究について論じてみた。

II 主な資料として、ニューヨーク・コロンビア大学、ユニオン神学校、パーク図書館のForeign Missions Conference of North America Recordsと、Charles W. Iglehart “A Century of Protestant Christianity in Japan” Tuttle company 1960、American Baptist Historical Society “War years collection.” BIM Archival Collections を参考資料として用いている。

III 太平洋戦争下における北米外国伝道協議会(FMCNA)の働き

1. 対日宣教政策のはじめ

1945年に太平洋戦争が終了してからの日本宣教は、キリスト教各派個別に行うのではなくFMCNAを窓口として行われた。

2. FMCNA (Foreign Mission Conference of North America)

1) FMCNAは、1893(明治26)年ニューヨー

クで初めて会議が行われて以来、キリスト教各派間の外国伝道に関し、同じフィールドや作業が重複しないよう整理、調整を図り宣教プロジェクトの方針を協議、決定、履行するための働きを主とし毎年、総会が行われた。地勢的に分けられた代表委員会、教育、医療、識字教育、研究を行う機能的代表委員会に分けられ、協議、検討を行うが、その中の地域代表委員会の一つとして、極東委員会、東アジア委員会がある。

2) 東アジア委員会CEA (Committee of East Asia)

太平洋戦争が起こってから、FMCNAの中の極東委員会、東アジア会(CEA)の両委員会はアジアにおける戦後計画の働きを担う特別委員会となり、アメリカの戦後の日本への宣教政策と復興計画の課題の整理を担う部署となった。

3. CEA戦後計画委員会

太平洋戦争開直後の1942年1月12日の東アジア委員会内に戦後計画委員会が組織され戦争終了後の日本宣教を視野に入れた課題整理を行うことに着手している。1942年10月20日に、太平洋戦争後の日本政策に有益であるとし、日本研究者で日本のキリスト教について詳しいA.K.ライシャワー(A. K. ライシャワー)、C.W.アイグルハート(Charles W. Iglehart) L.J.シェイファー(Luman J. Shafer)の3人の委員に「日本におけるミッションと日本の関係」についての課題の整理を依頼している。この報告書は、CEAの日本への宣教活動への諸問題を検討する資料として戦後計画委員会に提出された。

日本におけるミッションと教会についての主な項目としてミッションと日本の教会を関係づけた要因を①キリスト教徒の階層について②教派の教会政治について③国家主義について④宣教師の働きについてまとめられている。

4. アメリカの日本への警戒

1) 東亜伝道に対する警戒

FMCNAにおいては、CEAの委員会の働きが太平洋戦争により活潑化する1942年12月8日よ

り、極東での具体的な情報を得るために、ワシントンに南京でYMCAの指導者として日本の南京侵攻時、現地人を救出する働きをしていたエム・ソウル・ベーツ (M. Seale Bates) を代表として送っていた。中国での活動を強化するために、極東における日本の具体的な動きの情報を得るためであった。

2) アメリカからの援助金の減少

3) 日本人のキリスト教信徒を含む国家主義観、日本政府による宗教団体法等の日本国内統制

5. アメリカの日本研究の背景

A 指導者の認識

B アメリカの精神的土壌

C アメリカにおける背景の変遷

IV グリップスホルム号報告

1942年から1946年の、スウェーデンとアメリカ間の航路船であったリップスホルム号が太平洋戦争中、送還船として使用されていた。船体の赤十字からレッド・クロスとも呼ばれていた。1943年9月に横浜から出航した「帝亜丸」は、宣教師らに乗せて中立国であるポルトガル領のゴアに到着する。アメリカから第二次送還船として派遣されていたグリップスホルム号とおち合い、乗船客を交換した。到着地であるニューヨークまでの船中、宣教師らに日本のキリスト教の活動報告、社会報告と日本基督教団の組織構成についてまとめさせたものがグリップスホルム報告である。

報告書の編集委員として、ポール・メイヤー (Paul S. Mayer)、W.アキスリング (W. Axling)、トマシニアレン (Thomasine Allen)、R. L. ダージン (Russel L. Durgon)、J. L. フーパー (J. L. Hooper)、L.S. アルブライト (L.S. Albright) 6名が任命された。

その報告書の内容は、日本基督教団の動向、神学教育の統合、アメリカ側の東亜伝道への危惧についての報告がある。

FNCNAは、日本政府が日本基督教団を宗教法人として認可したのは、キリスト教が国際的なつながりを持ち、宣教地のキリスト教関係者と交流して宣撫工作に従事させられるのではないかと考えていたからである。日本基督教団の国外活動は主に中国大陸であり、華北、華中における中国キリスト教が外国ミッションとの関係を断ち、日本と提携するよう促す働きかけを行っているを見ていた。日本の東亜伝道については、大東亜局の下で教団が組織的な視察活動を行い、アジアへの影響力を拡大していた。その働きは、居住する日本人への伝

道だけでなく、日本が占領した地域の中国人キリスト教徒を日本基督教団に組み入れるための働きであったと見ている。このような事実を断片的にはあるが、アメリカ側が知り得た情報とグリップスホルム号で強制帰国させられた宣教師らからの最新の日本情報を得ることを重視した上で、日本の占領下全域に日本が描いた極東の教会の将来構想への危惧が報告されアメリカ側の認識として把握されている。

V おわりに

これらのFMCNAのCEAによる課題整理に基づく研究により、戦後日本への宣教再開の道が開かれ、太平洋戦争中のFMCNAの日本研究は、戦後占領政策に大きな役割を果たしていく。

(9月例会 383回 2016年9月17日)

「国家と宗教」——思想史的考察(一)

原島 正

序 思想史研究の方法

私の研究方法は思想史です。思想史は、歴史の一分野です。けれども、ある歴史の出来事を専ら研究する所謂実証史学とは違います。思想史は文献学です。「認識されたものの認識」です。

思想史は、テキスト研究ですので、テキストを読むことから始まります。テキストには、時代の診断書である課題と処方箋であるその課題の解決法が記されています。テキストには時代のコンテキストがあります。研究者はテキストからその時代の課題を読み解きます。テキストにどこまでも忠実であるという意味で、思想史研究も実証的であることが求められます。さらにテキストには、そのテキストに内在するコンテキストがあります。そのコンテキストを読み解くことも研究者の課題になります。その場合、鍵となる言葉をみつけることが大事です。

思想史は、思想研究ですので、思想そのものの理解が求められます。けれども、事柄そのものを考察する哲学とは違います。さらに思想は、思想家の営みです。テキストは思想家の生涯の状況であるコンテキストがあります。したがって、そのテキストが発表されたときの思想家の状況を考察します。思想は変わります。若年の時のテキストと、壮年の時、老年の時のテキストとは、その思想内容に変容があります。その変容とその由来の考察も思想史

研究の大事な課題です。思想には変わらないところがあることは、事実です。けれども、思想史は、思想の歴史研究ですので、思想の変容、違いに注目します。

1. 「国家と宗教」

今回のテーマは「国家と宗教」です。私は「と」に注目します。「国家」とは何かを問うのは政治哲学であり、政治学です。「宗教」とは何かを問うのは、宗教哲学であり、宗教学です。私は「国家と宗教」について記されているテキストから、両者の関係がどのように考えられてきたかを考察します。私は、テキストから第一に国家観と、国家が宗教にどのように関わるか、関わるべきか、第二に宗教観と、宗教が国家にどのように関わるか、関わるべきかを読み解きます。

「国家と宗教」との「と」に注目すると、次の三点が考察の対象になります。第一が「政教一致」です。その場合、国家が宗教に含まれるのか、それとも宗教に国家が含まれるのかということになります。第二は「政教分離」です。その場合、国家と宗教とは全く別であるとして双方に無関心となるのか、それとも国家と宗教のそれぞれの独自性を尊重して、互いに拘束しないとするのかが問われます。そして第三に「国家と宗教」との緊張、すなわち「国家」が追求する価値と「宗教」が追求する価値との緊張をどのように考えられているかを問うこととなります。

2. 小崎弘道『国家と宗教』1913年

熊野義孝は、小崎の神学を「政教論神学」と命名しました。小崎によれば「一国の成立に欠くべからざるものは政と教の二つである。古来政教の関係を以て車の両輪、鳥の両翼に比したが、余は之を一家に於ける夫婦の關係に比したい」（傍点原文）『国家と宗教』3頁、というのが、小崎の基本的な考え方です。私の思想史研究は、小崎の宗教思想研究から始まりました。そして小崎の「国家と宗教」観は、前期と後期に違いがあったことを明らかにしました。前期の明治国家の形成期には「国家の元気」としての宗教が説かれました。その代表作が『政教新論』1886年です。国家を内側から形成していく宗教です。後期の明治国家の確立期には「国家安寧の基盤」としての宗教が説かれました。『国家と宗教』1913年はその代表作です。国民教化の手段としての宗教です。

小崎が生涯に取り組んだ課題は、三つありました。第一は科学、ことに進化論とキリスト教との関

係です。小崎は霊による神の内住を主張することで、進化論とキリスト教が矛盾しないことを弁証しました。第二は聖書を如何に解釈するかです。小崎は聖書のすべてが神のインスピレーションによる全部インスピレーション、全部ではなく宗教・道徳に関する部分インスピレーションではなく、聖書を読むものが神の霊に感化されるという倫理的インスピレーション説を採用します。聖書によって、神の感化を蒙って、その心意と感情に著しき変化を蒙るというのです。

小崎の生涯の第三の課題は「政治と宗教」の関係でした。小崎は両者を「宗教に基づいた道徳」によって結びつけます。小崎は「教育勅語」発布にいたる所謂「徳育論争」で『六合雑誌』に当時の徳育に関する論調を批判して、国家に「宗教道徳」の必要性を主張します。

3. 「三教者会同」

『国家と宗教』は、1912（明治45）年2月に当時の内務省次官床次竹二郎による提案によって、開催された「三教者会同」が契機となって出版されたものです。三教とは仏教、教派神道、そしてキリスト教です。その代表者を招き、二日間討議をして、決議文を全会一致で可決しました。床次次官は、欧米視察を通して欧米諸国は、宗教ことにキリスト教が国家の安定の基盤になっていることを知り、日本に於いても国家安定に宗教が果たす役割を認識して内務大臣原敬に進言して開催したものです。この「三教者会同」には、仏教側からは、大谷派のキリスト教の代表と一緒であることへの抵抗等で、さらにはキリスト教側からは、植村正久、内村鑑三たちの批判がありました。小崎は、とくに長年のとくに後期の主張である国家安寧のために宗教が大事であること、とりわけ今回は、三つの宗教の代表者が、特にキリスト教側からも代表者が正式に招待されたことをとても喜びました。

本書の序に「本書稿を起こしたのは昨年初め『三教者会同』なるものが行われた後間もなき事である。」と記されています。小崎の考え方を本書から紹介します。まず、小崎はこの会同の目的は次の三つであると記します。（108頁）

第一は、「宗教と国家との結合を計り宗教をして更に権威あらしめること。」

第二は、「国民一般に宗教を重ずるの心を起さしめんが為め。」

第三は、「各宗教家の接近を益々密にならしめ、以て時代の進運を扶翼せしめるべき一勢力たらし

める」こと。

以上の目的は、床次次官の発表した「三教者会同に関する私見」に明らかな所であると言います。さらにその意義として小崎は、「従来政府が宗教に対し常に曖昧なる態度を取った所を改めて、茲に明確なる態度を示したことが出来」たことを挙げています。とくに、小崎は「基督教に対する態度を明らかにし之を他の神仏二派と同一に取り扱ふに至った」ことを喜び評価します。

こうした政府の宗教政策は、明治維新以後、祭政一致から政教一致へ、さらに公認主義へ。さらに宗教疎外政策（無宗教制度）への変遷があり、それが大きく変わったことの現れとして評価します。しかしながら、それ以後の国家の宗教政策の方向を決めたものであり、キリスト教も国家の宗教政策の一翼を担うことになったと言えましょう。その意味で小崎の「国家と宗教」観を改めて考察する意義があると考えます。この「三教者会同」については、『植村正久とその時代』の第二巻の702頁以下に詳細に記されていますので、参照してください。

さらに『国家と宗教』の時期は、序によりますと明治天皇の逝去に始まり、西園寺内閣に代わり、山本内閣が組閣され藩閥と政友会との連立内閣が誕生する事件のなか、国民の間に『第二の維新』が叫ばれたことに小崎は注目します。小崎によれば、「此の新精神、新気運は唯政治思想の革新を来すべき者たるに止らず、宗教、道徳、教育の上にも大なる革新を来すべき者たるは亦疑ひない所である。」とします。本書には、列国における政教の関係、維新以後の政教の関係、三教者会同の意義、宗教と教育、国家隆盛の基礎等の各章と附録として明治天皇逝去のときの説教が収められています。

今回の発表は、第一回であり、続いて1938年に発行された田川大吉郎『国家と宗教』と1942年に発行された南原繁『国家と宗教』の同名の三書の内容の比較対照をする予定です。その場合、考察する視点は、田川の大日本帝国憲法第28条の「信教の自由」の解釈と評価、南原の宗教観と価値並行論です。さらに、内村鑑三と無教会信徒による「国家と宗教」観を考察することも考えています。

留学クリスチャン第一号女医岡見京の一生

堀田 國元

筆者は、「ディスカバー岡見京」という私家版の本（約160頁）を昨年（2016年）4月に刊行した。そ

のきっかけは、恩師である岡見吉郎先生（元北大農学部教授）の米寿を祝う会を開いたとき（2012年）に岡見先生が持参された一枚の写真であった。それは新渡戸稲造著の「BUSIDO（武士道）」の写真で、直筆で「謹呈 岡見於敬様 昔の心弟 新渡戸」と認めてあるように読めた。筆者は、岡見京（けい）が岡見先生の祖母に当たり、海外留学して女医になった最初の日本人女性であることを聞いていたが、新渡戸稲造との関係については初耳だったので、好奇心が湧き、調査を始めた次第であった。しかし、岡見京に関する情報は極めて限られており、本としてまとめるまでに足掛け4年の歳月を要した。ともあれ、女性が医師となることが非常に困難であった明治時代に、クリスチャンとして医療伝道を志し、海外留学（1885～1889）して女医となる道を初めて切拓いた偉大な先駆者である岡見京（1859～1941）の生い立ち、留學生活、帰国後の活動、引退後の生き方、さらに岡見家の系譜を軸とした女子教育や医療の系譜についてまとめることができた。そして、資料を探る過程で横浜共立学園を訪れたことが縁となって、当会の平成28（2016）年12月例会（17日、横浜指路教会）において岡見京についてお話しする機会に恵まれた次第である。

岡見京は、安政6（1859）年に西田耕平・ミエ夫妻の長女として青森に生まれた。慶応3（1867）年、西田一家は上京し、貿易業を始めた父の都合で横浜にも居を構えた。明治6（1873）年14才のときに京は、宣教師のプライン夫人が創立した横浜共立女学校に入学し、英語の教科書での授業、キリスト教の教え、讃美歌、そして西洋マナーという環境の中で過ごすうちに英語を身につけ、在学中に日本基督公会（横浜海岸教会）で受洗した。教師の一人に後々京の人生を導くことになるツルー夫人（長老派宣教師）がいた。京は、明治11年に卒業し、東京女学校に進学して2年間学んだ。二つの女学校時代を通じて英語に堪能となった京は、明治14年に桜井女学校（桜井ちか子が明治9年に創立。後に女子学院となる）に英語教師として奉職した。そこで横浜共立女学校から移っていたツルー夫人の感化を受け、医療伝道の道に目覚めていった。その一方、通っていた麹町教会の奥野昌綱牧師（同教会を明治10年に創立）から岡見千吉郎（せんきちろう）を紹介された。千吉郎（1858～1936年）は、奥平中津藩士の岡見清通（きよみち）・登米夫妻の二男として生まれた（長男は、頌栄女学校を設立した岡見清致 きよむね）。16才になると英国人のヘントンから普通学を学び、明治9年、18才のときに工部大学

校美術科(現 東京藝術大学)に第一期生として入学した。同年、グリーン宣教師から受洗してクリスチャンとなり、やがて品川台町教会の長老に選ばれた。二人は、貧民伝道について意気投合し、米国留学することを決め、明治17(1884)年8月に結婚した。

結婚の翌月、千吉郎は米国留学(ミシガン農科大学)に旅立ったが、同じ船で渡米した新渡戸稲造と親しくなった。京は、4か月後、外国女性にも門戸を開いていたペンシルバニア女子医科大学に入学するためにフィラデルフィアへ向かった。男尊女卑の風潮の強い世の中にあって既婚女性の留学は稀有のことであった。実現したのは、夫の理解に加えて、官に依らずに頌栄女学校を興し、“婦女子も遠く海外の人に交り、広く海外の事情を学ぶべし”という進取の勇を理念とする岡見家の後押しのお蔭であった。また、ツルー夫人の教えと献身的生き方に影響を受けたこと、かつ日本人留学生の後見人的役割を果たしていたフィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道協会(会長モリス夫人)などによる留学の根回しがあったことが大きな要因と思われる。

京は、ペンシルバニア女子医科大学に入学(1885年9月)し、ボドレー校長の庇護のもと勉学に励んだ。毎週午前9時半から夕方6時までタイトな時間割(化学、薬物学、産科学、婦人科学、解剖学、外科学、病理学、生理学、組織学。進級するとさらに内科学や治療学、耳鼻咽喉科学、眼科学。)が組み、授業内試験と解剖実習が行われた。さらに、週2回市内病院での診察研修があった。京は全科優秀な成績を修めて医学博士の学位を取得して1889年3月に卒業した。崇高なミッションをもっていたとはいえ、明治時代に日本から遠く離れた地においてか弱い日本人女性がたった一人で4年間を無事に全うしたことは驚異的である。モリス夫人は、「最初に会ったときは体が痩せていて青白い顔色だったので医学を研究するのは到底むずかしいと思ったが、4年を経たときには顔色も紅みを保ち、肉付きも良い身体となり、学問も進歩した。」と京の成長について述べている。京はまた、同時期に留学していた新渡戸稲造や内村鑑三らと交流したり、フィラデルフィアの先端文明や文化の刺激を受けたりして過し、帰国に際しては20冊ほどの聖書関連の本、人体骨格標本、手術道具などを持ち帰った。

明治22年(1889年)5月に千吉郎とともに帰国した京(30才)は、同年8月、医籍登録(5番目の女医)され、翌9月に高木兼寛が設立した東京慈恵医院

の婦人科主任として招聘された。この医院は貧民救済を目的に設立され、明治天皇陛下の庇護を受けていた。「この職分につくことは、婦人の開明上も重要であり、またこの職分を遂行することはキリスト教伝道のもつ意義にも一致する」という高木院長の励ましに京は大いに共感できた。高木兼寛は明治8年から5年にわたって英国留学したが、留学先のセント・トーマス病院医学校はナイチンゲールが創設した看護学校や病棟をもち、貧しい病人も受け入れ、女性医師や看護婦が活躍していた。その姿を学んだ高木院長にとって岡見京は大きな期待であり、京のために助手として東京女学校時代から旧知の本多詮子(女医登録第4番目)と看護婦取締の松浦里子が協力するよう囃らってくれた。二人ともクリスチャンであった。恵まれた職場環境の中で医療に従事した京は、私生活では長女(メリモリス)も授かり、また済生学舎の学生であった鷺山弥生(後の吉岡弥生)の要請を受けて「女子学生懇談会」の顧問に就任するなど充実した時期を過ごした。しかし、2年9ヶ月経った明治25年6月、京は慈恵医院を去ることになった。その原因は、明治天皇陛下が慈恵医院に行幸されたとき、女性という理由で拝謁を遠慮するようにとの理不尽な指示が宮内省から出されたことに抗議したためと言われている。が、それ以上に、傾倒するツルー夫人やモリス夫人が日本における医療伝道活動の一環として看護学校の設立に京の協力を求めたことが大きかったようである。京は、高木院長による厚意と処遇に対して非常に敬服し感謝していたが、子供の養育と医療伝道を夫と力を合わせて実践する道を選んだのであった。

慈恵医院を去って1年後京は、モリス夫人の資金提供を基にしたツルー夫人による「衛生園」という療養所づくりに協力し、ツルー夫人とともに園内に一家で移り住んだ。しかし、この種の施設は前例がないという理由で病院としての認可がなかなか得られなかった。そうこうしているうちに胃潰瘍を抱えて療養していたツルー夫人は永逝してしまった。京は、“夫人の一生は全く上帝の前に献げたりき。求むるところは富に非ず、欲するところ一身の安逸に非ず。献身的生産、これ最初で最大、最高そして最後の目的なりき。伝道も教えも事業も凡そこの動機による結果なり。夫人の謙遜、柔和、貞淑、信仰、敬虔などの美德は、この動機によりて開かれたる美花なりき。”と追悼文を書き残している。京は、ツルー夫人の遺志を実現すべく奔走し、親交のあった赤坂病院のW・ホイットニー院長の

協力を得て、同病院の分院としてようやく認可を得ることができた(明治30年)。また、桜井女学校にあった看護婦養成所(ツルー夫人が明治19年設立)が衛生園内に移された。

当時の宣教師と家族、中でも女性が病床につきたときにもっとも困っていたことは、看護の心得のある日本人女性がいないことであった。その状況の打開を使命に感じたツルー夫人は、明治20年頃から病前病後のための療養所の設立を決意し、実現したのが衛生園であった。しかし、彼女は実際の運営をみることなく世を去ったのだが、代わって京は英文のパンフレットをつくるなどにより衛生園の意義と存在を世にアピールした。衛生園の重点は結核の予防と回復期療養に置かれた。実際の療養滞在者のほとんどは外国婦人や宣教師らであったが、千吉郎・京夫妻がつくりだした明るく慈愛深いクリスチャンホームのような衛生園にみな満足した。一方、看護婦養成所はナイチンゲールの教育方針を守り、実習労働に対する金銭的見返りを求めず、患者に対する細やかな心遣いをもって運営された。こうしたミッションに千吉郎・京夫妻は心血を注いで努力を続けたのだが、開設13年後の明治39年に衛生園と看護婦養成所を閉園するやむなきに至った。フィラデルフィアからの資金援助が打ち切られたためであった。京の活動に注目していた吉岡弥生(東京女子医科大学創立者)は、「日本人にとって発病初期または回復期の病人は重要と思われてなく、そのためにお金を使う事はありませんでした。岡見さんの新しい仕事は結局理想に終わってしまいました。」と回想している。一方、姪の宮地奈美は、「これほどまでに叔母を大胆な女性にし、勇敢な積極的行動家にしたのは叔父の深い愛と理解と信仰の力とと思いました。」と記している。

衛生園時代に千吉郎・京夫妻は、二人の男児(聞多と清二)を授かり、長女のメレーを含めて充実した生活を送っていた。その間に衛生園内につくったチャペルは、やがて長老派レバノン教会となり(明治37年)、千吉郎は長老に選ばれた。閉園後、衛生園の建物は女子学院の分教場(高等科)と寄宿舎として転用され、後に高等科は東京女子大学に統合された。京は、女医の仕事を辞し、女子学院高等科で英語と生理学(保健衛生)の教師として勤めたが、二年ほど経った頃に乳がんがんに犯され、女子学院を辞めることになった。さらに、ソプラノ歌手として将来を囑望されていた長女メレーも乳がんがんに犯され、大正3年、23才の若さで召天するという不幸

に見舞われた。以後、京は社会活動を止め、関東大震災(大正12年)の翌年に下目黒に居を移し、敬虔なクリスチャンとして静かに生きることを選び、未信者への伝道活動や新渡戸稲造、内村鑑三、河合道(恵泉女学園創立者)らも参加したバイブルクラスを開いて過ごした。姪の宮地奈美は、「あの元気で明るく進取の気性に富んでいた叔母は、以前とは似ても似つかぬ弱々しい慎ましやかな、謙虚な、痛々しいほど病み細った姿になってしまいました。…悲しみ苦しみを乗り越えてから叔母の信仰は底知れず深いものになって行かれたと思います。」と述懐している。千吉郎は肺炎のため78才(昭和11年)、京は胆のう炎のため82才(昭和16年)で召天された。

「彼女ほど恵まれた環境、清冽な業績、しかも女性として最も祝福さるべき天与の美貌に恵まれながら、彼女ほど無名であった人を知らない。全人格をただ神の恩恵に託し、信仰について多くを語らず、まして個人的にも、社会的にも名声を意味するものを一切欲しなかった。」と松田誠名誉教授(「慈恵病院女医第一号・ドクター岡見京子」「高木兼寛の医学」)が評しているように、京の一生はクリスチャンとしての矜持を保ち、貧民伝道・医療伝道をミッションとして、信仰に支えられた高尚な生き方を静謐に謙虚に貫いた一生であった。

わたしは母の胎をはだかて出た またはだかて母の胎に戻ろう(ヨブ記)

(12月例会 386回 2016年12月17日)

【編集後記】

このたび、3年以上前から準備してきました横浜プロテスタント史研究会編『横浜における女性宣教師』(仮称)がまとまり、有隣堂から出版することが決まりました。半分以上原稿が集まり、手を入れて送ってくる原稿も4月末にはすべて整うことになっています。執筆者は、「横プロ研」のメンバーが中心になっています。編纂人は、安部純子会員、小玉敏子会員、森山みね子会員の3人が骨を折って下さいました。感謝申し上げます。

1990年には『図説横浜キリスト教文化史』を、2008年には『横浜開港と宣教師たち』を有隣堂から出版しました。今回で3冊目になります。皆さまのご協力によって研究会が運営されています。どうぞ、研究会に出席くださって会を盛り立てて頂きますようお願い致します。(岡部一興)

二人の大先輩を偲んで

高橋昌郎先生を偲ぶ



2017年1月16日逝去
95歳

当研究会の元会員の高橋昌郎先生が昨年11月4日に逝去されました。高橋昌郎先生は、長いこと日本プロテスタント史研究会の世話人として研究者を育ててこられました。高橋先生は、1946年に東京大学文学部国史学科を卒業、高校の教諭をされ、さらに東海大学、清泉女子大学で日本史を教えられ、日本史学の視点から、実証的研究をされてきました。

高橋先生と私の出会いは、1977年8月6日の同研究会において、工藤英一先生の紹介で小生が「長谷川誠三について」という題で発表させて頂きました。それ以来かと思えます。この研究会で5回ほど発表させて頂きました。この研究会は熱心な研究者が多く、私は大内三郎先生、鶴沼裕子先生、大濱徹也先生などと出会いました。研究会に出たとき、高橋先生は鎌倉でしたのでご一緒させて頂くことができました。先生は、御自分の研究を話してくださいました。あるときのこと、富士見町教会史の戦前編を執筆したのだが、戦後編を執筆する方が書かないので印刷されず眠っているという話をされました。この事は先生の葬式の時にも話題になりましたが、未だに眠ったままで大変惜しいことと思っています。戦前編だけで結構ですので、先生が書かれたものを出版されることを願っています。

先生が一番初めに出された著書は、『島田三郎』（基督教史学会1954年）で、他に『人物叢書 中村敬宇』（吉川弘文館1966年）、『文明開化』（評論社1972年）、『福沢諭吉』（清水書院1978年）、『人物叢書 西村茂樹宇』（吉川弘文館1987年）、『日本プロテスタント史の諸相』編著、（聖学院大学出版会1995年）、『明治のキリスト教』（吉川弘文館2003年）などを書かれております。

残念ながら日本プロテスタント史研究会は、2007年4月7日（土）589回の例会を以って幕を閉じました。研究会は、小澤三郎先生たちによって

1950年に発足しましたので、実に57年も続いたわけです。日本プロテスタント史研究会は、8月も休むことなく毎月第一土曜日に、元旦でも研究会を行ないました。高橋先生は、1921年の生れですので、95歳でした。日本プロテスタント史研究会では、高橋先生が例会の案内を毎月約70名の方々に郵送してしていました。研究会の幕を閉じたとき、横浜プロテスタント史研究会も例会を持っているので、そちらの研究会で「横プロ研」に出席したい方がおられたらこちらの研究会に出てもらったらどうか、ということで、「日プロ研」の名簿を頂けないかというお願いをしました。先生は快く承諾して下さいまして、名簿を譲り受けました。その名簿の中の人たちに、横浜プロテスタント史研究会から参加の呼びかけをさせて頂きました。

高橋先生と最後にお会いしたのを調べたところ、昨年3月2日に原島正さんと一緒に藤沢の老人ホームをお尋ねしました。横浜プロテスタント史研究会員の原島さんは、1962年9月の例会から日本プロテスタント史研究会に出席したそうで、その時もまたいつもよく言っていたことですが、「日プロ研」に出席した先生方に育てられたと言っていました。高橋先生は車椅子でしたが、お元気で、現在執筆の書物のことを語って下さいました。高谷道男先生が、生前小澤三郎先生が立ち上げた日本プロテスタント史研究会に負けないように横浜プロテスタント史研究会も頑張ろうというようなことを言っていました。ということで「横プロ研」を続けることが高橋先生を忘れないことかもしれないと思っています。（岡部一興）

吉岡 繁先生を偲んで



2017年2月4日逝去
93歳

去る2月4日、吉岡繁先生が逝去したという電話を次男の吉岡成二さんから頂きました。途中奥様の道子様へ代わって話をしました。その頃、毎週長男の方が一泊しては夕食を作り一緒に食事をするようになっていたそうです。夕食におかずの外に刺身を食べたそうです。食べてからお腹の調子が悪くなり、その後寝床についたそうですが、

朝いつものようには起きてこないで、起こしに入ったところ調子がよくないので、救急車で病院に運ばれ、肺炎で逝去されたということです。遺言があって身内だけで2月2日に葬式を終えたということで、ご連絡を頂きました。93歳でした。

吉岡先生と親しくするようになりましたのは、何時であったか定かではないのですが、1999年に横浜プロテスタント史研究会の会員になっていますので、この年からだと思っています。前述したように、先生は日本プロテスタント史研究会の会員でしたが、「横プロ研」のことを注目して下さって、麻布からよく出席して下さいました。奥様の道子様とご一緒のことが多かったように思います。2012年春、吉岡先生のお宅に遊びに行き、色々なことを雑談しました。広尾で下車フランス大使館の近くの閑静な場所で2階建てのテラスハウスで、こじんまりとした住宅に住んでおられました。吉岡先生は日本基督鎌倉教会において17歳の時信仰告白をしました。第二次世界大戦の終盤に入ると、兵力不足を補うため学徒出陣が考え出されました。高等教育機関に在籍する20歳以上の文科系学生を在学途中で徴兵し出征させたのです。1943年10月21日、明治神宮球外苑球場において学徒出陣壮行会が雨降る中で行なわれ、吉岡先生も参加しました。

1943年11月、吉岡愛、千代の養子となり吉岡家を継ぎました。祖父吉岡弘毅は1875年タムソンから洗礼を受け、吉岡家、松尾家は多くの伝道者を輩出しています。日本陸軍北朝鮮の羅南歩兵73連隊に入隊、「吉岡」と名前を呼ばれても、誰のことかピンと来なかったそうです。一人っ子であったこともあって、**実戦**には参加しなかったそうです。

1948年東京大学国史学科卒業、高橋昌郎先生も国史科の出身で、一緒に学んだ時期があったそうです。53年ウエストミンスター神学校を卒業、十合普次、園子の長女道子様と結婚、日本キリト改革派教会牧師に就任、66年には東北大学大学院研究科博士課程修了、67年から75年まで神戸神学校校長を歴任、75年再び仙台教会に着任、93年定年により引退しました。日本基督教団所属の信徒だったが、教団では将来的に立ち行かないということで、日本キリト改革派教会の牧師になったということを奥様の道子様が言っていました。

横浜プロテスタント史研究会との関係では、吉岡先生は、2002年7月の例会で「日本における改革・

長老教会の伝統について」というテーマで発表して下さいました。改革・長老教会は、1859年にアメリカ・リフォーメド教会とプレスビテリアン教会の宣教師が来日しました。改革教会とは16世紀の宗教改革時に生まれたプロテスタント教会のうちルター派とイギリス国教会と区別される教会の総称であります。教理面では、16、17世紀に出された改革派信条に示され、神学的には改革長老教会という言い方をし、教会政治の形態としては長老主義という言い方をしている。1941年日本基督教団が成立、第一部に属し、この最大グループは教団設立に最後まで反対しました。戦後の改革・長老教会と外国ミッションについても資料を基に発表されました。

吉岡道子様は会員ではありませんでしたが、2007年4月第280回「横プロ研」の例会において、「工部大学のキリスト者」と題して発表されました。電気学会に所属、研究発表されました。「横プロ研」例会では、工部省が山尾康三の建議によって設立され、1885年帝国大学工科大学となり、その年度までに212名が卒業、そのうち9名がキリスト者であった。その足跡を辿り、吉岡先生の祖父岩垂邦彦と大伯父の喜多村寛治を追跡された発表でありました。

最後に先生の著書を取り上げたい。『聖書信仰』宣教百年記念聖書信仰運動（1959）、『教会の政治』（1972）、『キリスト教会の礼拝』（1972）、『実践的伝道論』新教出版社（1996）、『緑のまきば』、つのおえ社（2004）、『改革派説教ノート』新教出版社（2006）、共著としては、『学徒出陣の記録』中央公論（1968）、『学徒出陣から50年』揺籃社（1972）、訳書としては、メイチェン『神と人間』聖書図書刊行会（1963）、『キリスト教とは何か』いのちのことば社（1976）、カルヴィン『キリスト教の生活要綱』つのおえ社（1983）などがあり、最近の編著では、吉岡繁編・西村徳次郎著『昭和キリスト教受難回想記』（2009）があります。そして先生が最後に関わったものには、『覆刻・日本基督一致教会信仰ノ箇条』教文館（2013）があります。先生はこの書の「はじめに」において、改革長老教会の信条翻訳事業で中心的に働いたヘボンとの出会いを通じて、日本基督一致教会が採択した「信仰ノ箇条」を真摯な信仰を学ぶことは大いに意義のあることであると述べています。

（岡部一興）